

ジェンダーについて考えよう

小 六

公園で転んで泣いている小さな男の子がいました。

「男の子なんだから、泣かないの。」

その子のお母さんは男の子にそう言いました。私は散歩の中、そのやり取りを何気なく聞いていました。そのときはよく目にする光景だからと、お母さんの言葉を深く考えませんでした。でも最近、テレビや新聞でジェンダーレス、ジェンダーフリーという言葉をよく耳にするようになり、ふと、そのときの光景を思い出しました。

ジェンダーレスとは、男女の性差をなくそうという考え方で、さまざま

取り組みが行われていることを知りました。例えば、おもちゃを男の子用、女の子用と分けないことや、学校の制服を、ズボンかスカートどちらかを自由に選べることなどです。私が一番身近に感じることは、男女を色で分けるときに、男は青、女はピンクなど、イメージで決めつけることをなくして、いこうという考え方です。

私は小さいころ、とにかく青色が好きでした。赤やピンクがきれいなわけではなかったのですが、好きなアニメのキャラクターの色も、青色でした。買い物に行つて「どの色がいい。」と聞かれたら迷わず「青色。」と答えています。服も、くつも、かみかざりも、たん生日の記念写真のドレスも青色を選んでいました。でも、「女の子だから

ピンクにしたら。」と言われた記おくは
ありません。私は、女の子だからピン
クという考え方で育てられたのではな
いことに気が付きました。

けれども、無意識に赤を選んでい
るのは、トイレのマークです。もし、駅
のトイレで、男性用のトイレのマーク
が赤で、女性用のトイレのマークが青
だったら、無意識に赤のマークを選び、
まちがえて男性用のトイレに入っ
まうと思います。それだけ青が男性、
赤が女性という色が無意識に定着して
いるのだと感じます。ニュースでは、
トイレのマークの色を青と赤で分けず
に、男女ともに同じ色にする取り組み
を見ました。私も、ショッピングモ
ールなどで見たことがあります。また、
ランドセルの色も自分の好きな色を選

ぶことができず。男の子はピンクを
使うべきではない、女の子はこの色
を使うべきだという、定着したイメージ
で無意識に決められた色を使うとい
う考え方も、好きな色を選ぶことが
できるように変わってきています。

私が公園で見かけた男の子のお母
さんは、きつと「男の子なんだから、泣
かないの。」と泣き止んでほしくて無
意識に言ったのだと思います。男の子
から、女の子だから、男の子のくせに、
女の子のくせにという、今までの長い
時間で定着してしまっている考え方を、
全部なくしていくことは、簡単ではな
いかもしれません。けれども、性別に
関係なく一人一人の人間として、おた
がいに認め合い尊重し合える社会をつ
くっていくために、私は、自分の無意

識に対して、問題はないのかということ意識して、生活しようと思えます。そして、身の回りの様々なジェンダー問題について考えることが大切だと思います。男の子だって泣いてもいい、ピンクは女の子だけの色ではないのです。